

平成 2 7 年度
石川工業高等専門学校の課題
外部評価報告書



平成 28 年 3 月

はじめに

石川工業高等専門学校では、教育・研究の改善に資するために、平成7年に自己点検評価部会を設置し、点検・評価の結果を報告書『明日へ向けて』として、3年ごとに発行しております。同時に運営諮問会議を設置し、地元の教育研究機関、行政機関、企業等の学外有識者による外部評価を毎年開催しております。

昭和37年（1962年）度に我が国に高等専門学校制度が創設され、本校はその第4期校として、1965年4月に設立されました。その間の平成16年（2004年）度に独立行政法人国立高等専門学校機構（高専機構）として一法人に統合され、現在は51校の国立高等専門学校から構成されております。独立行政法人通則法第30条の規定により高専機構は中期目標を達成するための中期計画を定めております。

平成16年度に開始された高専機構の5年間ごとの中期目標・中期計画は、昨年度からは第3期中期目標・中期計画が始まり、高等教育機関としての国立高等専門学校固有の機能を充実強化し、高等学校や大学とは異なる高等専門学校の本来の魅力を一層高めていくことが謳われております。また、高専のこれまでの実績を踏まえつつ、急激な社会変化への対応や、地域及び我が国全体のニーズを踏まえた新分野への展開等も目指すこととされております。

外部評価としては、独立行政法人大学評価・学位授与機構による「高等専門学校機関別認証評価」が7年ごとに行われており、昨年度に受審しました。また、同機構による認定専攻科（平成12年4月設置、電子機械工学専攻・環境建設工学専攻）を対象とした審査は、平成17年度に続いて平成24年度に受審し、引き続き「適」と認められました。さらに、本校専攻科は平成26年5月に「学位授与に係る特例の適用認定」を申請し、認定を受けました。今年度の学位申請者よりこの制度の適用を受けることになり、これまで同機構が行っていた「小論文試験」が省略され、一定の条件を満たすことにより学士（工学）の学位が授与されることとなります。一方、JABEE（日本技術者教育認定機構）対応教育プログラムとしては、本科4年生から専攻科までの4年間で構成される「創造工学プログラム」を平成17年度に設定し、平成22年に6年間の継続が認定され、今回は平成28年に審査を受けることとなります。

これらの数年ごとに実施される外部評価に対して、運営諮問会議による外部評価は、地域の事情に精通されている有識者の方々から評価をいただくもので、毎年実施されております。ほぼ各県に1校ずつ設置されている国立高専は、産学連携や技術者人材輩出等の地域貢献が重要な使命の一つであり、運営諮問会議は地域の様々なニーズを踏まえた御意見をお伺いできる貴重な会議と認識しております。

このような状況下で、このたび学外有識者の方々に本校の現状を知っていただき、忌憚のないご意見をいただくとともに、今後の学校運営についてご議論をお願いするために、去る平成28年2月26日に、運営諮問会議にご出席いただき、本校の幹部教職員が石川高専の現状についてご説明申し上げ、貴重なご意見を賜りました。

本報告書は各委員からの評価をそのままの形でまとめてあります。良い評価をいただいている項目がある一方で、厳しい項目もあることが認識できます。厳しい内容には逐次分析し、それに対応した改革を積極的に断行することが、本校に課せられた重要な使命であり、それがまた評価していただいた委員の方々の労に報いることでもあると考えております。

最後になりましたが、運営諮問会議委員の方々には、御多用な中、多大な労に心から謝意を表しますと共に、今後とも御指導、御鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

平成28年3月17日

石川工業高等専門学校
校長 村本 健一郎

目 次

はじめに

I	これまでの経過	1
II	外部評価（運営諮問会議）	2
	1 石川工業高等専門学校運営諮問会議委員名簿	2
	2 平成 27 年度石川工業高等専門学校運営諮問会議議事概要	3
	3 外部評価シート	9
III	運営諮問会議の意見の要約（講評）	
	運営諮問会議議長 松澤 照男	15
	運営諮問会議開催の公表	16
	おわりに	17

I これまでの経過

第1回運営協議会（平成16年3月開催）

第2回運営協議会（平成17年3月開催）

第3回運営協議会（平成18年3月開催）

第4回運営協議会（平成20年3月開催）

平成20年度運営諮問会議（平成21年3月開催）

平成21年度第1回運営諮問会議（平成21年11月開催）

平成21年度第2回運営諮問会議（平成22年3月開催）

平成22年度運営諮問会議（平成23年3月開催）

平成23年度運営諮問会議（平成24年3月開催）

平成24年度運営諮問会議（平成25年2月開催）

平成25年度運営諮問会議（平成26年2月開催）

平成26年度運営諮問会議（平成27年2月開催）

平成27年度運営諮問会議（平成28年2月開催）

Ⅱ 外部評価（運営諮問会議）

1 石川工業高等専門学校運営諮問会議 委員名簿

金沢大学理工研究域電子情報学系 教授 上 杉 喜 彦

公益財団法人

石川県産業創出支援機構 副理事長 斉 藤 直

石川工業高等専門学校 技術振興交流会 会長
(澁谷工業株式会社 取締役副会長) 澁 谷 進

石川工業高等専門学校 同窓会会長 新 谷 隆 二

石川県商工労働部長 田 中 新太郎

北陸先端科学技術大学院大学
理事（教育・学生・広報担当）・副学長 松 澤 照 男

津幡町長 矢 田 富 郎

石川県小中学校長会 中学校部会長
(金沢市立 大徳中学校長) 横 山 彰

(五十音順)

2 平成 27 年度石川工業高等専門学校運営諮問会議議事概要

1. 日 時 平成 28 年 2 月 26 日（金） 13 : 30 ~ 16 : 30

2. 場 所 石川工業高等専門学校 管理棟 2 階 大会議室

3. 出席者

・運営諮問会議委員

上 杉 喜 彦（金沢大学理工研究域電子情報学系 教授）
齊 藤 直（公益財団法人石川県産業創出支援機構 副理事長）
澁 谷 進（石川工業高等専門学校 技術振興交流会 会長
（澁谷工業株式会社 取締役副会長））
新 谷 隆 二（石川工業高等専門学校 同窓会会長）
松 澤 照 男（北陸先端科学技術大学院大学 理事（教育・学生・広報担当）
・副学長）
横 山 彰（石川県小中学校長会 中学校部会長（金沢市立 大徳中学校長））

・学校側出席者

校 長	村 本 健一郎
副校長（管理運営担当），技術教育支援センター長	高 島 要
副校長（地域・国際連携担当）	西 澤 辰 男
校長補佐（教務主事）	八 田 潔
校長補佐（学生主事）	川 原 繁 樹
校長補佐（寮務主事）	瀬 戸 悟
校長補佐（図書情報主事，図書館長）	鈴 木 康 文
専攻科長	金 寺 登
校長補佐（入試広報担当）	竹 下 哲 義
点検評価委員会委員長	深 見 哲 男
一般教育科主任	松 島 敏 夫
機械工学科主任	加 藤 亨
電気工学科主任	大 坪 茂
電子情報工学科主任	山 田 洋 士
環境都市工学科主任	富 田 充 宏
建築学科主任	小 林 勉
事務部長	村 松 薫
総務課長	伊 藤 幹 雄
学生課長	岩 崎 紀美枝

・欠席者 田中委員，矢田委員

・会議写真



松澤議長



村本校長



新谷委員

上杉委員



斉藤委員

澁谷委員

横山委員



4. 議事概要

【開 会】

総務課長から、平成 27 年度運営諮問会議の開会宣言があり、出席委員の紹介、本校出席者の紹介を行った。引き続き、配付資料の確認、日程の確認を行った。

【校長挨拶】

村本校長から、挨拶の後、当会議の議長を松澤委員（北陸先端科学技術大学院大学理事・副学長）に委嘱したい旨提案があり、了承された。また、運営諮問会議委員に対し、配付資料及び当会議の結果を踏まえた評価シートへの評価記載について、協力依頼があった。

【議 事】

1. 石川工業高等専門学校の実況-外部評価のための資料-の概要

標記全体説明及び資料の各章の概要について、次のとおり説明があった。

全体説明（村本校長）

I 理念・目的

第 1 章 学校の目的（高島副校長）

II 教育活動

第 2 章 教育組織（実施体制）（高島副校長）

第 3 章 教員及び教育支援者等（高島副校長）

第 4 章 学生の受け入れ（竹下校長補佐）

第 5 章 教育の方法および内容（八田教務主事）

第 6 章 教育の成果（八田教務主事）

第 7 章 学生支援（八田教務主事，川原学生主事，瀬戸寮務主事）

第 8 章 施設・設備（高島副校長）

第 9 章 教育の質の向上及び改善のためのシステム（深見点検評価委員長）

III 研究活動

第 10 章 研究体制と支援（西澤副校長）

IV 社会活動

第 11 章 地域社会との連携（西澤副校長）

第 12 章 国際社会との交流（西澤副校長）

V 広報・評価・管理運営

第 13 章 広報活動（鈴木図書情報主事）

本校からの説明後、質疑応答、意見交換が行われた。

主な質疑、意見は以下のとおり。

- （澁谷委員）in situ 教育をはじめ、石川高専における教育の工夫に改めて感銘を受けた。教育機関は有機体であると思っている。常に学生を如何に教育するかという本来の目的を忘れず、横の連携をしっかりと保ち、有機的な活動の中で学生を育てることが大事であるという認識が徹底されていることは、優れた点として評価できる。
- （上杉委員）国際化に対応するための教育について、どういことをされているか伺いたい。
（本校）先端的ではなく、例えば第4学年の学生全員を対象に海外研修を実施し、短期間ではあるが海外を体験させる等、地道に底辺の底上げを行うことが大事ではないかと考え実施している。
- （澁谷委員）理系優先、即戦力が求められる風潮に対して、疑問に思うところがあった。以前、校長から、「すぐに役立つ人間」はある意味、「すぐに役に立たなくなる人間」になる恐れがある。つまり、ある知識をもっていれば、すぐに役立つこともあろうが、幅の広い知識、優れた人間性を持ち合わせていないと変化に対応できないと伺い、なるほどと思ったことがある。今一度、教育機関として大切にされていることについて伺いたい。
（本校）高専は創設の頃から専門科目に偏ることなく一般教養を含めた教育を行ってきた。また、課外活動でも人間性を含め、社会人として必要となる能力を育んできた。その結果、永く社会に貢献できる人材を輩出し続けていることが、現在、高く評価されているものと考えている。なお、各々の教員が本校の掲げる教育理念、教育目標のもと、方向性を一にして教育に取り組んでいることが誇りである。
- （斉藤委員）志願者数のことだが、平成21年度から上下を繰り返している。志願者数が落ちた翌年に努力し、挽回しているということか。
（本校）学生募集については、同じことを継続して行っている。志願者数の上下については、実際のところ本校でもよく分からない。学生募集活動について中学校側のご意見を伺いたい。
- （横山委員）保護者を意識して学生募集活動を行う必要がある。中学3年生だけではなく、1年生から対象にして説明会等を実施すれば効果が期待できる。また体験入学は中学生が高専を理解する良い機会になっていると思う。なお、志願者数の上下については、中学校側でもよく分からない。
（本校）他にどのような広報が効果的と思われるか伺いたい。
（横山委員）高専の卒業後の進路実績は素晴らしいものがある。そこを積極的にアピールすれば良いと思う。
- （松澤委員）中学校からの要望に応え、推薦選抜での募集人員を増員させたとのことだが、推薦選抜、学力選抜での入学者のそれぞれの入学後の学業をはじめとする学生生活の状況分析、

フォローアップが必要と考える。

- （横山委員）学生支援，学生相談関係のことだが，配慮を要する生徒については，中学校から進学先に伝えることになっているので，聞いて欲しい。
- （上杉委員）高専卒で大学に編入学する学生を見ると，リーダーシップを発揮できる学生が多いように感じる。これは高専での課外活動や寮生活により得られたものと考えられる。
（松澤委員）特に寮生活で得るものは大きいと思う。学寮を運営していくことは大変かもしれないが，今後も継続して欲しい。
- （澁谷委員）企業との共同研究を今後，拡大させる予定はあるか。
（本校）これまで共同研究については，ある面，企業にご迷惑をおかけすることもあるのではと考えていたが，創立 50 周年記念事業の関係で多くの企業を訪問させていただいたところ，企業側から共同研究の話が出てきた。今後は共同研究も充実させたいと考えている。
- （松澤委員）教員はどの程度海外に行っているのか。
（本校）科研費を獲得すれば海外発表の機会は多くなる。通常の校費で配分される旅費では海外に行けない。
また，学生の海外研修については，その成果は出ていると考えられる。保護者も学生も一度海外に行ってみれば海外に対する抵抗感が少なくなるし，引率教員にとっても良い経験になる。学生の海外研修の継続，充実のために海外の交流先を開拓することは重要な案件である。

【まとめ】

（松澤議長）

基本的に教育，研究，地域貢献等の全てにおいてアクティブに活動されていると感じた。今，大学では教育重視ということが謳われているが，高専においては，ずっと以前から大切にされてきたことであり，もっと高専側からアピールされても良いと思う。研究活動においては，科研費の申請率，採択率，件数とも全国高専の中でトップクラスを維持しており高く評価できる。また，地域社会との連携，交流の面でも公開講座の継続的な開催，出前授業の実施等により地域に大いに貢献されていると思われる。

【閉 会】

村本校長から，委員に対する謝辞に引き続き，総務課長から閉会宣言があった。

（以上）

5. 資 料

1. 石川工業高等専門学校の現況-外部評価のための資料-
2. 石川工業高等専門学校の現況（資料編）
3. 石川工業高等専門学校 データ・写真集
4. 石川工業高等専門学校運営諮問会議規程
5. 石川工業高等専門学校「学校要覧」（平成 27 年度版）
6. 石川工業高等専門学校「学校案内 2016」
7. 石川工業高等専門学校の課題 平成 26 年度 外部評価報告書
8. 「石川高専だより」No. 89, No. 90, 特別号
9. トライアル研究センター「年報」第 12 号
10. トライアル研究センター ニュースレター Vol. 30, Vol. 31
11. 「灯火」第 117 号, 第 118 号, 別冊 29
12. 情報処理センター広報 Vol. 11
13. 石川工業高等専門学校評価シート（別途：5 段階評点基準）（委員のみ）

3 外部評価シート

記入要領

評点欄には下の基準による５段階評価の評点をご記入ください。

- ５：優れている あるいは 適切である。
- ４：やや優れている あるいは ほぼ適切である。
- ３：普通 あるいは どちらとも言えない。
- ２：やや劣っている あるいは あまり適切とは言えない。
- １：劣っている あるいは 適切とは言えない。

部	章番号	章タイトル	平成 27 年度		平成 26 年度
			自己評価 平均評定 (5 段階)	委員評価 平均評点 (5 段階)	委員評価 平均評点 (5 段階)
第Ⅰ部 理念・目的		本校の精神			
		沿革 概要及び卒業生			
	1	学校の目的	4.8	5.0	5.0
第Ⅱ部 教育活動	2	教育組織（実施体制）	4.5	4.9	4.8
	3	教員及び教育支援者等	4.5	4.8	4.8
	4	学生の受け入れ	4.5	4.8	4.8
	5	教育の方法および内容	4.5	4.8	4.8
	6	教育の成果	4.5	4.4	4.6
	7	学生支援 学習支援等（7.1～7.4） 進路指導（7.9～7.10）	4.6	4.8	4.9
		学生支援 課外活動・生活指導・ 学生相談等（7.5～7.7）	4.6	4.9	5.0
		学生支援 学生寮（7.8）	4.6	5.0	5.0
	8	施設・設備 共同利用施設	4.0	4.3	4.6
	9	教育の質の向上及び改善のためのシステム	4.5	4.4	4.4
第Ⅲ部 研究活動	10	研究体制と支援	4.5	4.8	4.7
第Ⅳ部 社会活動	11	地域社会との連携	4.5	4.9	5.0
	12	国際社会との交流	4.4	4.3	4.4
第Ⅴ部 広報・評価・ 管理運営	13	広報活動	4.4	4.5	4.3
	14	評価			
	15	管理運営			

委員のご意見

部	章	記入欄
第Ⅰ部 理念・目的	本校の精神 沿革 概要及び卒業生 第1章 学校の目的	・「教育理念」が明解かつ必要に応じ変更も可とする校長の方針に感銘。 ・学校の目的は適正であり、職員に周知徹底していることは良いことです。 ・「夢に向かって磨き創り拓く」精神のもと、更に地域社会への関心と国際的な視野を育む教育に努め、世界で活躍できる人材を育てて欲しい。 ・適切に設定された理念、目的に沿って、学校運営がなされていると思われる。 ・基本理念、教育理念および学習目標は的確に設定され、教育活動が展開されており、社会からも評価が高い。
第Ⅱ部 教育活動	第2章 教育組織（実施体制）	・教育機関も「有機体」との認識と実践が最体化されていることに感銘。 ・実施体制もしっかりしており、教員は大変良くやられていると思います。 ・落ちこぼれを減らす方向性は良いと思いますが、たとえ留年しても学生自らが勉学に励むことができるように指導をお願いします。 ・精神的な病を発症した時は特にグループ学習が不得手になると考えられますので、成績や授業方法への配慮が必要ではないでしょうか。 ・課外活動においても良い成績を収めており、学生の支援も十分行われていると思います。 ・中学生や保護者を対象に、更に広報活動を活発にして欲しい。 ・アクティブラーニング型の授業実施に向けて、全教職員で研修に努めて欲しい。
	第3章 教員及び教育支援者等	

	第4章 学生の受け入れ	・海外研修旅行については、継続実施して欲しい。 ・部活動の指導は、教員にとって負担になる面もあるが学生の健全育成のためにもがんばって欲しい。 ・特別支援を要する学生への対応や教育相談体制の充実を図って欲しい。 ・学校内外の状況に対応して執行部による運営の効率化のための組織改革や教員間の連携強化の方策がとられており、適切である。
	第5章 教育の方法および内容	・本科，専攻科とも順調に学生受入がなされている。また，地域を代表する難関校として，優秀な学生を受け入れるための多様な活動も効果的に機能している。今後，若年層の減少傾向が長期的に続く中，これらの努力が益々重要になると思われる。 ・卒業生，修了生や就職先企業へのアンケート調査が示しているように，学校での教育の成果がはっきり現れており，教育の方向性は正しいものである。 ・学生の勉学，研究意欲を高める種々の取り組みが継続して行われており，今後も継続して取り組まれる事を期待する。
	第6章 教育の成果	・高専での寮生活や各種グループ活動は，実社会での人間形成に大いに役立ちリーダーシップを発揮する素地を形作るものであるので，今後もより一層の支援が期待される。 ・努力していただいているが，在学生の50%以上が県外就職になっているのが残念。また，サービス業への就職も多いように思います。
	第7章 学生支援	・県内就職率アップのため長期インターンシップの一層の充実を期待しています。 ・平成27年度に行われた組織改革を積極的に評価したい。特に入試広報委員会の強化および専攻科委員会の活動に注目したい。 ・専任教員の学位取得率が高いこと，企業からの教員採用，また女性教員の採用などバランスのとれた教員組織

	第 8 章 施設・設備	は評価される。 ・ 中学からの要望に沿って推薦入学の定員増を行ったようだが、推薦選抜と学力選抜のフォローアップしたデータの分析が必要に思われる。 ・ In situ 教育を積極的に導入し大きな成果を上げている点は評価されるが、従来からの「座学」の科目についても、問題意識をもたせたアクティブラーニングの積極的な導入が望まれる。また、ルーブリックなどの導入による教育成果が期待される。
	第 9 章 教育の質の向上及び改善のためのシステム	・ 自主的学習の支援体制が整備されていることは評価されるが、特にオフィスアワーの利用状況や具体的な成果に関する分析が望まれる。 ・ 学生寮は高専教育の重要な場と考えられる。学生の生活そのものを支援することから様々な課題があると思われるが、更なる発展を期待したい。
第Ⅲ部 研究活動	第 10 章 研究体制と支援	・ 科研費も多く採択されており、大変良いと思います。 ・ 運営資金獲得のため外部資金を取れる研究も必要ですが、学生を教育することとのバランスを考慮して下さい。 ・ 学校長の強いリーダーシップのもと、科研費に代表される外部資金獲得に向けた実践的な取り組みが行われ、教職員の意識改革もありその成果が見える形で現れている。外部資金獲得には日々の研究活動が大きく反映することから継続して高専機構のトップを走って行かれることを期待する。 また、研究意欲の高い若手教員の採用を積極的に進めていることも大きく寄与しているものと思われる。 ・ 県内企業との共同研究を更に増す努力を期待しています。 ・ 科研費に全員申請することを目標として、95%の高い申請率となり、校長自ら査読および助言によって、高い採択率になっていることは高く評価できる。また、「オーダーメイド数学活用大辞典システム」の構築も、高く評価できる。

第Ⅳ部 社会活動	第 11 章 地域社会との連携 第 12 章 国際社会との交流	・即戦力（すぐ役立つ）を求める社会の風調に流されない行き方に感銘。守って欲しい。 ・理工系優先の風調に学生が偏りなく対応するようにして欲しい。 ・地域への出前授業など大変良い連携を行っていると思います。 ・留学生の受け入れや全学科での海外研修など国際社会との交流についても大変良いと思います。学生には、日本のこと地域のことを海外の人に伝えることができる知識を教えてください。 ・グローバル化という世の中の大きな流れに対して、学校教育、研究においてどのような取り組みを行うかは、実際に努力されている方々の視点と外部（企業人）の見方とは時に大きく乖離していることが多い。技術書や科学論文をすべて完璧に表現できる母国語（日本語）による自己形成（自己表現力、討論力、レポート作成力など）を行いつつ、そこに順次付加して行くことが効果的だと思われる。 ・国際交流として新規開拓や継続して取り組むことは多くの努力が必要である。特に外国の教育者や研究者・技術者との人脈形成が重要であるので、地元企業や学校間の連携のもと進めることが相互に相乗的効果を発揮すると思われる。 ・公開講座の継続的な開催、出前授業の実施、技術講習会など地域社会、地域企業などに大きく貢献していると思われる。今後の活動に期待する。 ・第 4 学年の全学科の海外研修旅行が実現できたことは高く評価されるが、これまで以上に学生の海外派遣や留学生の受け入れを積極的に展開して欲しい。
第Ⅴ部 広報・評価・ 管理運営	第 13 章 広報活動 第 14 章 評価 第 15 章 管理運営	・「灯火」発刊の理念と実行に感銘。 ・中学生向けや保護者向けに広報誌の編集が行われているとのことで、分りやすく、高専に興味を持つような内容になっていると思います。 ・学校長の強いリーダーシップのもとで学校運営がなされていると強く感じられ、今後も息切れせずに邁進されることを期待します。

〔全体についてのご意見〕

- ・教育，研究，社会活動と限られた人員で大変多くのことを実施されていると思いました。
- ・50周年を迎え，更に長く石川高専が存続するよう期待しています。
- ・膨大な資料の作成，ご苦勞様でした。お陰様で学校の様子がよくわかりました。今後とも更に貴校が發展することを期待しております。
- ・学校が一丸となって努力されており，言うことがありません。
- ・これまで高い評価が得られている高専教育，石川高専教育をますます發展させようとするご努力や活動が拝見でき，更なる發展を期待しております。

Ⅲ 運営諮問会議の意見の要約（講評）

運営諮問会議議長 松澤照男

石川工業高等専門学校（以下、石川高専）から、全体の概要説明に続いて、「理念・目的」、「教育活動」等に区分した事項について説明があり、その後、質疑応答・意見交換が行われた。なお、委員からの主な意見は以下のとおりであった。

1 学校の理念・目的について

石川高専の理念・目的に関して各委員からは、「適切に設定された理念・目的に沿って学校運営がなされている」、「学校の目的は適正であり、職員に周知徹底されていることは良いこと」等肯定的な意見が多くあった。

2 教育活動、学生支援について

委員から、「学生アンケート等から教育の方向性は正しいことが確認されている」、「in situ 教育を導入し、成果を上げている点は評価できる」、「ラーニング・コモンズの整備計画やオンリー^{ワン}プロジェクト等、学生の勉学意欲、研究意欲を高める工夫がなされている」等の肯定的な意見が多くあった。なお、留年・退学が少なく、丁寧な教育指導がなされていると考えられるが、引き続き生活指導も含め、キメの細かい教育を実施することが望まれるとの意見があった。

また、第4学年の全学生を対象とする海外研修については、学生が海外を体験することは有益であるので継続して実施してほしいとの意見があった。

3 入試広報について

入試広報体制を強化し、多様な広報活動により地元の難関校として優秀な学生を順調に受け入れているが、今後15歳人口減少傾向が長期間に及ぶことから、これからの活動が重要になるとの意見があった。

4 研究活動について

校長のリーダーシップの下、教職員が科研費に代表される競争的資金獲得に向けて努力し、全国高専の中でトップクラスの実績を挙げていることは評価できるとの意見があった。

5 地域連携等社会活動について

公開講座、出前授業等により大いに地域に貢献しているとの意見があった。

以上、石川高専の教育、研究、社会活動等については、各委員から肯定的な意見が多く出された。これまでの取組を継続して実施するとともに、今後、更に工夫、改善を図り、発展が遂げられることを期待する。

運営諮問会議開催の公表

・石川工業高等専門学校ホームページ

平成27年度運営諮問会議を開催

2月26日（金）、平成27年度運営諮問会議を開催しました。この会議は、石川高専の教育活動、研究活動、社会活動等についての自己点検と評価に基づき、学外有識者による評価と提言を行い、今後の教育の改善、研究や地域貢献の活性化を図ることを目的としています。

当日、同会議には、大学、中学校、地域企業等の学外有識者6名と学校側から校長、副校長、主事をはじめ幹部教職員20名が出席しました。

はじめに村本健一郎校長が挨拶を行った後、議長に北陸先端科学技術大学院大学理事・副学長の松澤照男氏が選出されました。

議事に入り、村本校長による学校の概要説明に続き、教育活動、学生指導、研究活動、地域貢献、国際交流等について各担当者から説明があり、その後、質疑・意見交換が活発に行われました。

本校では、各委員からいただいた貴重な提言を活かして一層の運営改善を行い、今後の活動の充実につなげていくこととしています。



会議風景



議長の松澤北陸先端大理事・副学長

・刊行物

文教ニュース 2016年3月7日

石川高専では、学外有識者による外部評価を行う運営諮問会議を去る2月26日に開催した。写真Ⅱ。同会議は、石川高専の教育活動、研究活動、社会活動等に関する自己点検と評価に基づき、学外有識者による評価と提言を行い、今後の教育の改善、研究や地域貢献の活性化を図ることを目的としている。

同会議には、大学、中学校、地域企業等の学外有識者6名と学校側から校長、副校長、主事をはじめ幹部教職員20名が出席した。はじめに村本健一郎校長の挨拶後、議長に北陸先端科学技術大学院大学理事・副学長の松澤照男氏が選出された。

議事に入り、村本校長による学校の概要説明に続き、教育活動、学生指導、研究活動、地域貢献、国際交流等について各担当者から説明があり、その後、質疑・意見交換が活発に行われた。

委員からは多くの有意義な意見や提言があり、最後に松澤議長から全体の講評が行われた。同校では今回の貴重な提言を活かして一層の運営改善を進め、今後の教育研究活動の充実につなげていくこととしている。



議長 松澤北陸先端大理事・副学長



文教速報 2016年3月9日



松澤議長



石川高専（村本健一郎校長）は、学外有識者による外部評価を行う運営諮問会議を、2月26日に開催した。この会議は、同校の教育活動、研究活動、社会活動等の自己点検評価を、学外有識者による評価と提言により、今後の改善や活性化を図ることを目的としている。

同会議には、学外有識者6名と校長、副校長、主事など同校幹部教職員20名が出席した。松澤照男北陸先端大理事・副学長が議長に選出され、村本校長の挨拶・概要説明に続き、各担当者から個別事項説明がなされた。委員からは多くの意見や提言があり、同校ではこれを活かして一層の運営改善を行い、発展と充実につなげたいとしている。

Ⅱ 石川高専 Ⅱ

平成27年度運営諮問会議

おわりに

高等教育機関は、自らその運営について点検評価することが求められ、また外部の機関あるいは識者からの外部評価を受けることが求められている。本校が受ける外部評価には、制度として義務づけられているものに「高等専門学校機関別認証評価」（「認証評価」）があり、また進んで受審するものとして日本技術者教育認定機構(JABEE)による外部評価がある。本校は、昨年、「高等専門学校機関別認証評価」を受審し適切な高専教育の機関として認定された。28年度には、JABEE受審も予定されている。

ところで、本校が独自に毎年度の活動や運営について外部識者からの提言や評価を受けるものに「運営諮問会議」がある。地域の教育機関、自治体、産業界、そして本校の同窓会からの委員の皆様によって、事前に示した本校の現況をまとめた資料に基づいて、具体的に評価をしてもらう。認証評価やJABEEが、どちらかという本校の教育機関としての教育システムや制度的な充足性を点検評価していただくことに重きがあるのに対して、本校の「運営諮問会議」では、その年の教育研究活動の成果や今後の計画を具体的に示して、率直な批評や助言を受けるものである。本校としては、一々の事案やデータをつぶさに示して、細かな提言を受ける格好の機会である。「運営諮問会議」は、毎年度末に開催している所以である。

本校は、今年度、創立50周年を迎えた。石川の地で、国立高専が技術者の育成を通して貢献してきた、その一つの節目にあたる。本校の任務は、「早期専門教育によって実践的創造的な技術者を育成する」ことを実現することにある。学校を取り巻く社会の状況は刻々と変化し、それに伴って時代時代に様々の活動を展開することが求められているが、高専の技術者教育の本質そのものは変わることはない。即ち、高専の基本的な使命は、「技術者を育成する」ことにある。そして、そのための方法として、「早期に専門教育を開始する」ということである。石川高専の教育は、創立50周年を迎えた今も、以上のような本質において変わるところはない。その上で、時代に即応して柔軟に対応していくことも、特に産業界から求められていることである。そういうことを、基本的に確認した上で、今年度も、運営諮問会議の委員の皆様に、率直なご意見を伺うこととした。

（正課教育）

本校の最大の使命は、何よりも入学生を教育し技術者として育て上げることにある。正課教育こそがすべての核となる。本校は、引き続き全国高専の中でも留年・退学者の少ない学校の最上位に位置づけられている。いわゆる5年卒業率も高い。こうした教育の基本的なところに価値を置く姿勢は、中学校や地域の信頼を得るための最も重要な要素である。委員の皆様の、最も大きな関心も例年ここにある。今年度は、加えて、専門教育と基礎教育の具体的な融合、高専機構のモデルコアカリキュラムに対応した教育課程改定への取組み、低学年を中心とした基礎教育の新しい取組み（ラーニング・コモンズ）などが示された。丁寧な教科教育活動をとおして、力のある技術者を育成しなければならない。

（課外活動）

技術者の育成は、専門の学業によってのみ可能なものではない。本校はかねてより「文武両道」を教育のねらいとしている。青年期の健全な発達には、自らひたむきに取り組むものをみつけ、先輩への崇敬や仲間との協調をもって人間的な成長を伴う必要がある。広く課外活動はその最も有効な方法である。象徴として、今年度、北陸地区高専体育大会総合10連覇達成の成果がある。課外活動の様々な分野で継続して、人間教育に重きを置いていることの現れである。学生会の強い意志や教育後援会の支援も、一つの目的に向かって結集されている。創立50周年記念事業の中心事業に、課外活動等も想定した「スクールバス」を更新して購入することを、誰ためらうことなく掲げ得たのも、こうした活動の重要性を等しく共有しているからに他ならない。

例年に変わらず、活発な課外活動の成果に対して、委員の皆様からは称讃の声が相次いだ。

（学寮における生活指導）

高専教育の重要な特色の一つに、学寮における教育がある。今日の社会では、珍しい制度といってよい学校における寮生活は、学生の多面的な成長に大きな効果をもたらしている。しかも、15歳からの寮生活は、様々の意味でかけがえのない体験を蓄積してくれる。高専には、低学年全寮制の学校もあるが、本校は選択的に入寮するシステムである。しかしながら、遠く能登地区、加賀地区、更に県外出身の学生の多くは、寮生活を前提に入学する。予め入寮が前提されている面から言えば、特に緻密な計画やプログラムをもって指導にあたらねばならない。寮での生活指導は、高専の教育に大きな役割を果たしているのである。委員の皆様からも、これを重要視する意見が相次いだ。同窓会からの委員の方の体験談も加わって、例年にも増して、高専と寮生活について熱心に意見が交わされた。

（研究活動）

高専の教育は、教員（技術職員も含めた研究スタッフ）の研究成果や研究に取り組む姿勢によって支えられている。それが、一つの学校として個性的な教育のダイナミズムを生む。また、後述する地域の産官などとの連携にもつながっている。教員自身の、積極的な研究意欲（勉学意欲といってもよい）のないところに、学生への教育の充実は望めない。教育と研究は表裏一体を成すものである。本校は、研究活動の一つの指標となる科学研究費の採択件数の多い高専である。昨年度は、全国高専の第1位、今年度も上位にあった。特にここ5年間の躍進はめざましく、申請可能な立場にある教員のほぼ2人に1人は採択されている、といってよい状況にある。これは、特に大学側の委員の方から注目され高く評価された。ただ、今日の傾向として、国立高専機構はもちろんのこと一般的な指針として、「外部資金の獲得、特に科研費の獲得」がしきりに標榜され、そのことに躍起になる向きがないわけではないが、本校の場合は、それに翻弄されることなく、冷静にそれぞれが自身の研究状況を確認する機会をとらえ、また同僚と相互に建設的な意欲の刺激をもって成果に結びつけている。好ましい状況と思われる。研究活動への取り組みは、あくまでも冷静でなければならない。

（地域連携・地域貢献）

例えば、創立当初の高専と今日の高専の大きな違いの一つに、地域との連携、地域への貢献のことがある。高専に限らず、高等教育機関が地域と連携してその役割を果たすことは、今や当然のことになっている。学校は、学生への教育だけでなく、地域社会に対してその使命を果たさなければならない。本校でもトライアル研究センターを中心に、出前講座、出前授業、共同研究等、年間を通して継続的な活動が行われている。当初は、非日常的な、特定の行事的な活動の色合いが強かったが、現在では、ほとんど日常の教育活動と連動して溶け込んでいるといえる。例えば、専攻科の特別研究の一環として行われている出前授業は、専攻科生が主体のプログラムであるから、すぐれて正課教育の一部をなしているのである。また、技術振興交流会主催の企業技術説明会は、専門学科の高学年生のキャリア教育の一環をなすもので、これは年々規模を増している。技術者教育にとって地域との連携は、学校が地域にサービスをすることを超えて、学校が地域から具体的な教育活動の支援を受ける段階に進んでいる。技術振興交流会や石川県からの委員の方からの暖かい激励は、本校にとって何にも代え難い活力となった。

（国際交流）

本校の国際交流活動、グローバル人材教育のねらいは、学生全員を対象とするプログラムの実行にある。本校は、計画的にこれを進め、今年度は、第4学年の海外研修は初めて全学科即ち4年生全員を対象に実施された。機械はタイ、電気、電子情報は台湾、環境都市、建築はベトナムで各学科においてそれぞれ成果を得た。国際交流は、ともすれば選ばれた一部の学生を対象とするプログラムに傾きがちだが、教育プログラムとして確実に位置づけるためには学校全体の教育活動の中に組み込まれる必要がある。この成果は、よく事情を承知している大学側委員から評価された。同時に、全学科に亘る場合の研修先の確保など、こういうプログラムにつきものの課題に、今後の相互協力が話題となった。グローバル人材教育は、これからの重要な課題である。高専間、近隣の大学、地域の企業等の協力を得て、より安定した教育プログラムに育てていかなければならない。

（学生募集）

学校にとって、志願者を確保することは、その存立の基盤に関わることである。本校は志願者確保を重要な日常活動と位置づけ、入試広報委員会を中心に戦略的に取り組んでいる。とはいっても、一時的な宣伝活動に堕することなく、あくまでも本校の基本的な使命や教育活動の内容を、よりの確に、また志願者の適切な進路選択の参考に資するように、丁寧な広報活動を進めることを基本に置いている。学校の信頼を得るには、本校での在学中の学業のありようや卒業後の進路、いわば本校の教育成果を率直に示すことであり、そのために日常の教育活動に努めることである。例えば、夢と希望を抱いて活力をもって社会に大学に進むこと、留年・退学といったつまずきをできる限りなくするよう努めることなどは、当然のように見えて本校を広報する最も重要な力になるものである。また、今日の社会の中での、技術者の存在意義、必要性を適切に説明することも志願者の重要な選択要素である。加えて、

石川や富山の地域の産業や社会事情なども、学校の側から分析しておく必要がある。そうした観点をふまえながら、何よりも志願者の皆さんに、本校を直接みてもらう、そういうねらいから、体験入学やオープン・カレッジの企画は続けられている。今年度は、保護者の皆さんに説明できる時間を増やしたり、受験生だけでなく、中学生全体向けに、石川高専を知ってもらうための講演会を設けたりなど、新しいメニューを加えて実施された。このような取り組みを経て昨年に比して、志願者が増加したことは、委員の皆様からも評価された。

(創立50周年の年に)

本校は、いわゆる専願校として、高専をめざす、すなわち石川高専を第一志望とする志願者の拡大に努めている。これは創立以来、揺らぐことのない本校の立場である。

本校は、昭和40年に、機械工学科、電気工学科、土木工学科の3学科でスタートした。後に、建築学科、電子情報工学科が加わった。土木工学科は、環境都市工学科と改組され、現在の5学科となっている。土木工学科の改組は、当時大学の工学部を含めた土木工学の質的な変化に対応したもので、全国的な趨勢であった。本校は、これ以外に、例えば、学科の名称変更や、コース制をとともう改組（全体を1学科とする等）を行ったことはない。機械工学、電気工学、環境都市工学（土木工学）、建築学、電子情報工学という、学問分野を率直にわかりやすく示した学科名は、志願者や地域にとっても内容を理解しやすい。また、朝令暮改のような頻繁な学科改編は、志願者や地域の信頼を損ねかねない。なにより、堂々とそれぞれの学科が、自信をもって工学教育、技術者教育に当たっていることを示すことは、確固として安定した本校の教育の道を示すことになるだろう。

創立50周年のこの年、本校の中庭に、以上の5学科の名（6つの学科名）を刻んだ「高専教育之碑」を建立したのは、こうした高専教育のありようを改めて確認し未来に発信したものにほかならない。今年度の運営諮問会議は、委員の皆様、学校側ともに、創立50周年に対する感慨と同時に、改めて学校としての責任の重さに思いを致すこと頻りだったと思う。

貴重な時間を共にしていただいた委員の皆様に、深甚の謝意を表します。我が国の実践的創造的技術者の絶え間ない育成のために、本校は更に高専教育に邁進していきます。

平成28年3月28日

副校長（管理運営担当） 高島 要



平成 27 年度
石川工業高等専門学校の課題
外部評価報告書

発 行 平成 28 年 6 月
編 集 総合企画会議
発行者 石川工業高等専門学校
〒929-0392 石川県津幡町北中条
TEL 076-288-8000
FAX 076-288-8014
URL <http://www.ishikawa-nct.ac.jp/>



独立行政法人国立高等専門学校機構

石川工業高等専門学校

National Institute of Technology, Ishikawa College